

核再処理工場囲む再エネ



進め下北の時計

「これだけの施設が集まっているのは世界でもここだけ」と電力業界関係者が自画自賛する国内唯一の原子力関連施設が、青森県六ヶ所村にある。まさかりに例えられる下北半島の「柄」に位置する。

核燃料の再処理工場だ。原子力発電所で発電を終えた使用済み核燃料を化学的に処理してプルトニウムとウランを取り出す。完成すれば、年間800トの使用済み核燃料を処理し、核燃料サイクルの要となる。

遅れる本格稼働 「原発再稼働と核燃料サイクルは車の両輪。オールジャパン体制で審査に臨んでいる」

10日、再処理工場の現状について、日本原子力発電の吉田薫は報道陣にこう強調

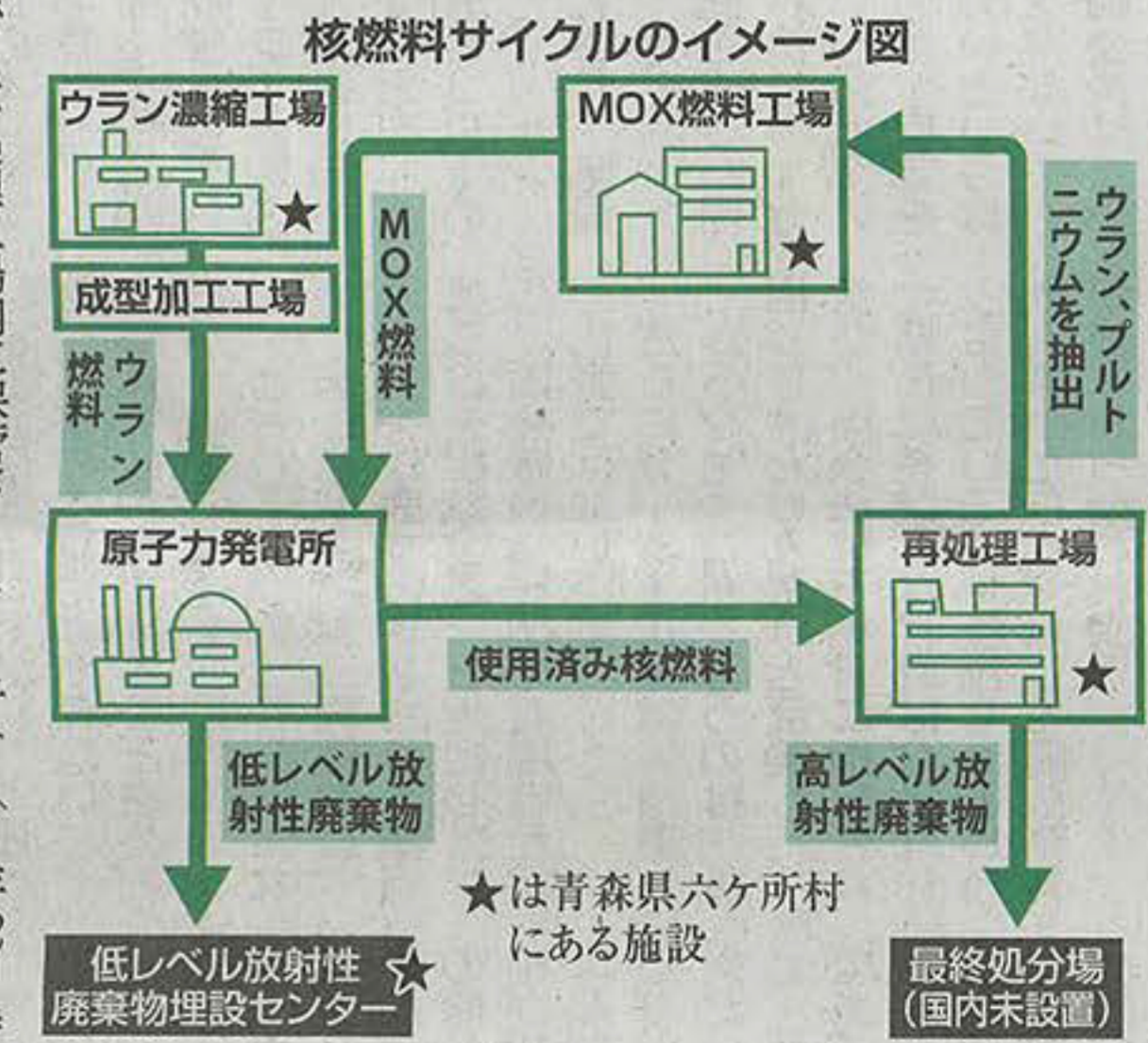
「原発再稼働と核燃料サイクルは車の両輪。オールジャパン体制で審査に臨んでいる」

10日、再処理工場の現状について、日本原子力発電の吉田薫は報道陣にこう強調

「原発再稼働と核燃料サイクルは車の両輪。オールジャパン体制で審査に臨んでいる」



部に限られる。再処理工場が本格稼働しなければ、す



でに再処理工場内に保管されている約2968トの使用済み核燃料に加え、各地の原発に保管されている約1万6千ト(3年12月時点)の使用済み核燃料が行き場をなくしかねない。再処理工場の本格稼働の

遅れに対し、大手電力各社からなる電気事業連合会も危機感を抱き、原子力規制委員会の審査対応などで日本原燃に約70人の応援を派遣。昨年9月には「サイクル推進タスクフォース」を新設した。

風車やパネル

一方、施設の周囲には、風力発電用の大型の風車や太陽光発電用パネルが目立つ。太平洋から吹く冷たい風「やませ」は凶作をもたらす、住民を苦しめたが、いまはやませと広大な土地を活用した再生可能エネルギーの一大拠点に変貌しつつある。

11面に続く



1面から続く

大規模な風力発電は平成15年1月から稼働が始まり、令和5年3月1日時点で村内では108基の風車から最大19万4250キロワットの発電を行う。平成25年には同村初の大規模太陽光発電所(メガソーラー)も建設され、現在は最大16万8千キロワットの電力を供給する。

また、電気設備の導入や省エネ支援などを行う電巧社(東京)など3社が共同で立ち上げた「六ヶ所村ウィンド・ソーラー協調発電所」は既設の太陽光発電所に風力発電所を新たに併設した。夜間や曇天で太陽光発電ができない間は風力発電で補う形で安定的な電力供給を目指している。

電巧社環境ソリューション部長の石原敦夫は「六ヶ所村は再エネに適している場所だ」と語り、

化石依存リスク 再認識

六ヶ所村政策推進課の担当者も「原子力、再エネの、いずれにも率先して取り組む」と強調する。

ただ、ベースロード電源としては原発が再エネより優位に立つ。ウクライナ危機で海外から輸入する化石燃料に依存するリスクが再認識され、エネルギー安全保障への関心も高まっている。政府は今年2月、再エネとともに原子力を「最大限活用する」と盛り込んだGX(グリーン・トランスフォーメーション)実現に向けた基本方針を閣議決定した。

使用済み核燃料の再利用や処分方法が決まっていない現状はしばしば「トイレのないマンション」と批判されてきた。再処理工場が本格稼働すれば、ウラン・プルトニウム混合酸化物(MOX)燃料を作ることで、最後に残る高レベル放射性廃棄物を再処理前の約4分の1に減らせる。

原発再稼働とともに、再処理工場の完成は原子力政策の大きな力を握る。敬称略(永田岳彦が担当しました)

※出典：2023年3月16日発行 産経新聞